

NEWS!

Vol.30-4
No.163
平成23年10月号
編集・発行
松浦機械製作所

メカトロテックジャパン2011(MECT2011)に出展

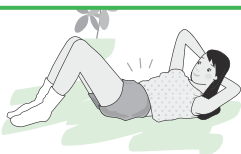
平成23年度最大規模の工作機械・工具・機器関連の展示会「メカトロテックジャパン2011(MECT2011)」が平成23年9月29日～10月2日の4日間、ポートメッセなごや(名古屋市国際展示場)において開催されました。今回のテーマは「日本中のものづくりを元気にしたい」をテーマに工作機械、塑性加工機、切削工具、測定機器、CAD/CAM/CAEなどの新製品から新要素技術まで、365社が1409小間に最新のテクノロジーを展示アピールしました。

マツウラのブースでは、「未来を変えるソリューション」をテーマに、超精密を実現する全軸リニアモーター駆動5軸加工機のハイプレシジョンリニアモーターマシン「**LF-160**」の初出展と、安心・安全をコンセプトにした5軸制御立形マシニングセンタ「**MX-520**」を出展しました。さらに、マツウラが提供するCAD/CAMシステム「**GibbsCAM**」の最新版のV9.5、新発想のプログラム支援ソフト「**TruePath**」などを出展しました。



日本のヘソ

福井 No.162



福井は日本のドマン中「日本のヘソ福井」第162回目は「映画「へそもり」」の話です。

今年秋に映画「へそもり」が公開されました。舞台は、美しい自然広がる紙すきの里、福井県越前市です。この映画は、「日本の中心」(越前市大滝町内)にある「へそ」と呼ばれるタイムトンネルの通行札をすく技術を継承する和紙職人一家がタイムトンネルの悪用を防ぐため、代々守り続けているというSF作品です。日本のヘソの存在が福井を舞台に映画化されたことになります。

今から40年前に、当時10歳の少年5人が、ひょんなことから、不思議な祠(ほくら)と穴(へそ)に遭遇する。その少年たちが、その穴の探検をはじめると、いつの間にか、幕末に迷

い込み、異国人と間違えられ、あやういところで越前和紙の紙すき職人「たけじい」に助けられる。「たけじい」とは、これまで1500年もの間、代々その穴を守ることを密かに受継がれてきた「へそもり」である。40年後、秘密の場所にあった祠と穴が、世間に発覚してしまう。「へそもり」を受継いだ主人公たちが、悪いことに利用されない様に、穴を守る物語です。

入谷監督は「和紙発祥の地であり、1500年の歴史を持つ越前和紙の存在が大いにロマンをかきたてられる。全国的に見ると、これだけの歴史と文化が意外と知られていない。もったいない、これを知ってもらいたいとの思いが、この映画をつくりたいと思ったきっかけです」と語っています。福井藩士が現代にタイムスリップして、雪の福井県庁のお堀を歩くシーンは藩士の気持ちになりじ〜んとききました。その他にも福井市の足羽山など多数のロケが福井で行なわれています。この映画で、「日本のヘソ福井」が全国的に知られるとうれしいです。是非映画館でご鑑賞下さい。

ユーザーを訪ねて No.149

合成繊維製造機械で世界 TMT マシナリー株式会社

今回のユーザーを訪ねては、JR予讃線の松山駅から車で西に15分ほどにあるTMTマシナリー株式会社松山工場（愛媛県松山市）取材しました。取材には山下章二工場長、酒井義則生産技術課長にご対応頂きました。合成繊維機械の競争が激化するなか、村田機械株式会社、東レエンジニアリング株式会社、帝人製機株式会社（現ナブテスコ株式会社）の3社が共同出資で平成12年にTMTマシナリーを設立しました。設立以前は、中国市場が拡大するにつれ、国内3社の合成繊維機械事業部は互いの過当競争で疲弊している状況でした。その解決策として、競合メーカー3社からの出資による会社設立となりました。今年は会社設立10年目です。「社員は約300名で、この内約100名が技術者です。ニッチな業界で特殊製品なので、全て自分たちで開発しています。エンジニアリング会社という選択肢があるのかも知れませんが、それではモノづくりが無くなり技術と現場が離れるので、現在の様に技術・製造を持っている企業が強みとなっています」と山下工場長。



▲松山工場全景

京都テクニカルセンター、石山工場、松山工場

3社の合成繊維製造機械事業部からスタートしていますので、各工場の立地場所は設立前とあまり変わっていません。しかし、各工場の特徴を活かし効率アップを図っています。石山工場は産業素材などに使われる特殊糸に関する機械や液晶をコーティングする特殊機械の生産、松山工場は衣料用糸の製造機械を担当しており量産が中心です。技術・開発は京都テクニカルセンターに集中・統合させています。

性能向上を続ける合成繊維製造機械

合成繊維は、石油を原料として作られるポリエステルやナイロンが主な材料となっています。用途は衣料用の糸が

主流ですが、産業資材の糸も増えています。車一台には約30キロの合成繊維糸が使われています。例えばカーシート、シートベルト、エアバックやラジアルタイヤの強化糸として使われます。その他にも釣り糸、網、ロープや建設土木用のジオテキスタイル等、多数使われおり需要は多彩です。同社は、合成繊維製造機械の総合メーカーとして、多様なニーズに最適な紡糸・延伸・巻取りシステムを提供し、それらの糸を使われる様々なお客様の付加価値と多様性への挑戦をサポートしています。

松山工場で作っている合成繊維糸を作る工程を説明します。材料を熔融し、ミクロン単位の穴から押し出します。押し出された糸はホットローラーに巻きつけられ、加熱され（150度～200度）伸ばされます。この工程が延伸と呼ばれ、伸ばすことで強度が増します。その後巻取機でお客様の仕様に合わせた形状に巻き取ります。同社のお客様は、この巻かれた糸を使って様々な製品を作り出していきます。従って巻く形状はお客様の要望により多種多様になっています。



▲歓迎ロビーにて、山下工場長と酒井技術課長

松山工場の主力製品「高速テークアップワインダー」

糸をボビンに巻き取る高速ワインダーが同工場の主力製品です。PET、ナイロン用のツインヘッド高速テークアップワインダーが現在主流です。この機械の構造は、ボビンを回転させる2本のボビンホルダを持ち、巻取り速度は最高6,000m/minの高速で合成繊維糸を巻取ります。ボビンホルダは片持ち構造で、1本が満巻きになると自動的に予備のボビンホルダに入れ替え連続24時間巻き取っていきます。「業界が特殊であり、急成長ありません。50年以上同じ作り方で糸は作られていますが、様々な糸が開発されています。お客様の要求は如何に早く巻くか、巻き取られたパッケージを織物メーカーに如何に早く納品するかです。その為にもどれだけ効率良くパッケージを作れるかが大事

トップの技術力と実績を誇る



ATi-418R/12

ATi-459 for SPANDEX



▲テークアップワインダー

です。ポビンホルダの長さは当初は800mmでしたが、現在では1,800mmの製品も作られ、我々も信じられない状況です。またポビンに糸を巻く形状、固さ、端面を真っ直ぐにする技術など、様々なノウハウが当社にあります」と山下工場長。

5軸複合マシニングセンタ「CUBLEX-63 PC18」を設備

「業界が特殊であり、急成長も無いので、今以上の工場拡張は考えていません。但し、革新的機械があれば入れ替えていく方針です。その方針に従って18面パレットを有するマツウラの5軸複合マシニングセンタ**CUBLEX-63 PC18**を平成22年10月に設備しました。この機械をマツウラ本社で見学した時、“18面パレット付きだがコンパクトである”との印象でした。加工部品は、高速ワインダーの



▲CUBLEX-63 PC18

TMTマシナリー株式会社 概要

本 社 〒541-0041

大阪府大阪市中央区北浜2-6-26

TEL 06-6204-8370

URL www.tmt-mc.jp

京都テクニカルセンター

京都府京都市伏見区竹田向代町136

石山工場 滋賀県大津市園山1丁目1-1

松山工場 愛媛県松山市北吉田町77

代 表 者 代表取締役社長 三木 勝策

設 立 平成14年4月

従 業 員 353名

事業内容 合成繊維製造設備の開発、設計、製造、販売及びアフターサービス
機械部品・電子部品・電子デバイス製造装置の設計、製造、据付、販売

ポビンホルダを支えるターレットテーブルという部品です。この部品は、巨大なベアリング構造で焼入れされた箇所に円筒コロを入れる形状の旋削加工があり、当社でも難しい加工です。導入前はマシニングセンタ3台とターニング1台で加工を行っていましたが、**CUBLEX-63**ではマシニング加工と旋削加工をこの1台で全て行っています。また、18面パレットにより長時間無人運転を実現しています。結果、仕上げ加工時間は、105分が65分に短縮され、35%効率アップを実現しています」と酒井生産技術課長。

合成繊維市場の将来性

「当社市場の約90%は中国です。あまりにも中国に依存しているので、非常にハイリスクではないと言われることもあります。インド、ブラジル等への拡販も行なっていますが、合繊繊維の世界生産量上位30社の6割以上が中国企業であり、必然的な構図となっています。中国の繊維メーカーは、一つの町に匹敵する広さの工場もあります。20年前には一工場に出荷するワインダーはせいぜい数十台のレベルでしたが、近年では数百台、1,000台のレベルとなっています。また、世界のナイロン原料生産量は頭打ちになっていますが、中国では大規模のナイロン原料生産工場を建設中であり、この分野の成長が予想され2014年くらいまで現在の好況が続くと考えています」と山下工場長の言葉です。

液晶TVや携帯電話など様々な日本の工業製品が、グローバル市場の中で技術的優位性があっても市場獲得が難しい状況にあります。そのような環境下であり、競合会社3社が共同出資して誕生した同社の経営に、グローバル社会で勝ち抜く日本企業の一つのカタチを見た取材でした。

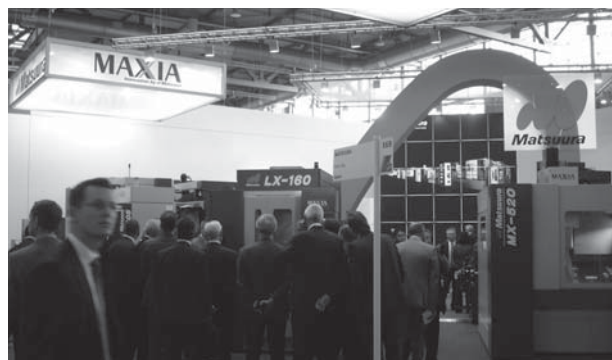


EMOハノーバー2011

最新技術を欧州市場にアピール!!

世界の工作機械メーカーが出展し、規模、内容とも世界最大クラスの工作機械見本市「EMOハノーバー2011」が9月19日から24日までの6日間、ドイツのハノーバーメッセで開催されました。会場のハノーバーメッセでは17万6283㎡のスペースに世界の工作機械、工具、周辺機器メーカーなど2037社が41カ国・地域から出展。地元ドイツからは819社、イタリアから261社、台湾から155社、中国から97社、日本からは75社が出展していました。展示スペースでは、ドイツが75,713㎡で1位、日本は19,679㎡で第2位となり、日本企業はEMOショーでも大きな位置を占めていました。

欧州はギリシャ問題の発生により、設備投資意欲がどうか懸念される中で開催となりました。来場者は2007年の同じハノーバーで開催されたEMOショーと比べ3万人ほどの減少した138,651人となりました。



飛躍する技術をアピール

マツウラブースはブース中央にマツウラマークの楕円形上部をイメージした大型のアーチ形状のモニュメントを配置し、お客様を出迎えました。

出展機種は、今年7月に発表しました全軸リニアモーター駆動の5軸加工機ハイグレードリニアモーターマシン「LX-160」、5軸制御立形マシニングセンタ「MX-520、MAM72-100H」、5軸複合マシニングセンタ「CUBLEX-35」、そして横形マシニングセンタ「H.Plus-405」の5機種を出品しました。

製造現場では、コストダウンに対応するために無人運転機能が求められています。しかし長時間の無人運転にはハード、ソフトを含めて長年形成したノウハウが必要で、マツウラでは、MAM72シリーズで、そのノウハウを培ってきました。その無人運転ノウハウを活かし、更に旋削加工と研削加工が出来る32面パレット装備の「CUBLEX-35」で生産効率アップをアピールしました。

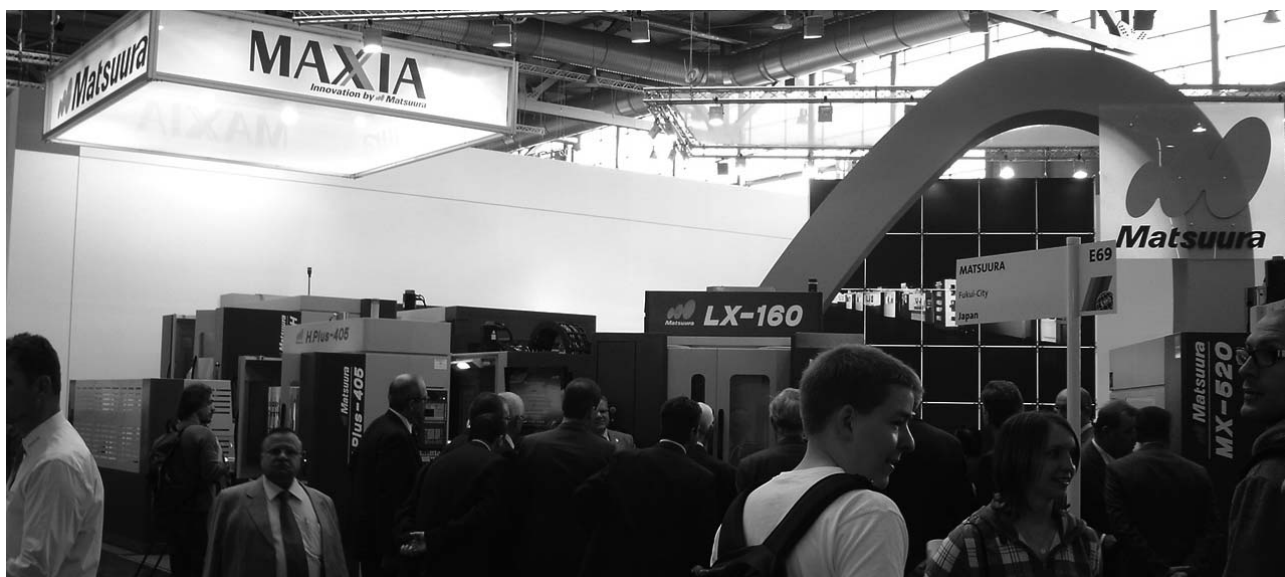


よりお客様の現場に近い加工実演

欧州市場で好調に推移する航空機産業を自動車産業をターゲットとした部品を現場に近い状況で加工実演しました。「LX-160」では、タービンブレードの高速加工と金型加工の実演。「MAM72-100H」では大型機械部品を加工し、チタンなど難削材加工の実力をアピール。お客様は現場に近い加工実演のために、各機械の前でマツウラの担当者と真剣に議論している光景が見られました。

マツウラブースでは出展した5機種の内4機種が5軸及び複合加工機であり、長年5軸加工機の開発で培ったノウハウに高い評価を受けました。5軸加工機では、主軸への接近性に問題がある場合がありますが、特に「MX-520」では、「マツウラの機械は接近性が良いので操作し易い、コンパクトで機械全体がスマートである」とのユーザーの声がありました。





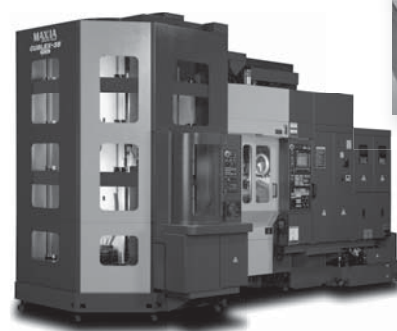
■ EMOショーで実演した加工サンプル

ハイグレードリニアモーターマシン
LX-160

NEW



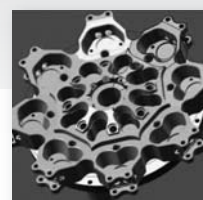
5軸複合マシニングセンタ
CUBLEX-35



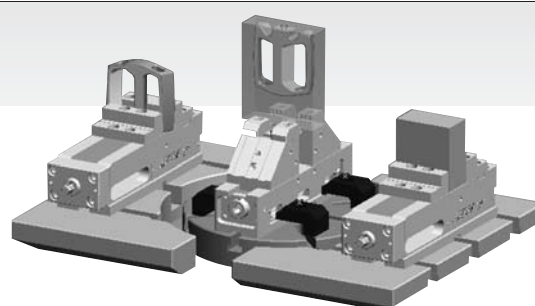
横形マシニングセンタ
H.PLUS-405



5軸制御立形マシニングセンタ
MAM72-100H



5軸制御立形マシニングセンタ
MX-520



新オプション(フラットテーブル)を使った加工デモ

品質工学社内報告会の開催

マツウラでは、毎年品質工学社内報告会を開催しており、今年は8月5日（木）に開催しました。マツウラニュース7月号で紹介しましたが、6月22、23日に行なわれた第19回品質工学研究発表会にて金賞、銀賞をマツウラの研究が受賞しています。今回は、その受賞研究とその他の研究を含め6件の発表が行なわれました。マツウラでは技術本部のみでなく、生産本部も品質工学への取り組みを本格化しており、各本部より50名以上の出席で報告会が行なわれました。

長年マツウラの品質工学を指導して頂いている応用計測研究所株式会社代表取締役矢野宏氏も同席され、報告と活発な議論が行なわれました。第1部は生産本部より「加工面粗さラップ作業による改善」、「作業者の技能評価」、「摺り合せ作業の評価方法」の発表があり、第2部では技術本部より「MT法による主軸寿命予知システムの開発」、「ソフトウェア開発における設計過程への品質工学的手法の導入」、「1刃1回転の切削電力評価を用いた粉末積層造形条件の最適化」と合計7つの発表がありました。



品質工学社内報告会



富山高等専門学校早川先生

今回は、最後に特別講演として、富山高等専門学校の早川幸弘先生から「茨城地方の地震発生のパターンの定量化と予測」の話をしていただきました。早川先生は、波形の研究を行っていますが、その理論を応用して地震の余地を研究されています。今回の発表では、「茨城県の5箇所の地震測定結果を分析して80時間前に地震の予想を行う。地震の起こっていない状態を基準として、そこからデータが離れているかを検証する」というものです。早川先生は地震の専門家ではありませんが、品質工学を使って地震予知研究に取り組まれていることに、参加者は品質工学の奥深さを実感していました。

松浦社長の談話「品質工学に取り組み初めて15年の歳月が経ち、設計部門だけでなく、ようやく生産部門でも発表出来るようになってきた。今回の報告を聞いて品質工学で芽生えたものを全社的に育ててきていると感じます。今年は金賞、銀賞を頂いたが、ゴールはない。今後も精進して常に品質を良くしていきたい。」

見聞録



会長 松浦 正則

「今回の EMO を見て」

EMO の会場で、日本人のエンジニアと見られる人から、突然「どうして日本の工作機械がこんなにたくさん出ているのですか?」と質問され、改めてその原因を素直に考えてみました。

工作機械が産業として歩み始めたのは英国で、蒸気機関と繊維産業に必要な加工をするためでした。一方、日本の工作機械は、自動車

とエレクトロニクスの二大産業の常に精密でよいものを早く安く手に入れたいと要望に対し、ひたすら応え続けてきました。その結果、モノづくりの基盤である工作機械マザーマシンとして技術確立を成し遂げてきました。現在では、1/100mm の加工精度から、自動化・無人化システムの開発、更にはナノレベルまでの加工が可能になりました。結果的には、欧州の工作機械水準に追いつき、名門工作機械メーカーと肩を並べるまでに成長したのです。

しかし、本当にそれが正しいのかを、今回の質問は問いかけています。我々は、特に自動車産業の進展に合わせ、技術も生産もひたすら要求に応じてきました。その結果、トヨタ自動車をトップに、日本の自動車メーカーは世界市場を闊歩す

るまでに成長し、また世界的なエネルギー政策に伴うハイブリットから電気自動車等の開発でもわが国は一步先んじて動いています。しかし、電気自動車は、エンジンやトランスミッションも無い車です。将来の自動車産業では、工作機械での加工が活かされる場面が小さくなって来ている様で、先行きが心配です。

欧州の工作機械メーカーは、日本メーカーとは異なり自動車やエレクトロニクスを重点的に狙わず、自己の技術を基にニッチ市場での世界制覇を目指しているようです。彼らは、新素材等の特殊材料の加工を機械・工具・切削条件をパッケージにした「ソリューション」で提供しようとしており、日本の工作機械メーカーとの事業の進め方の基本的な違いを知らされました。

特別寄稿 「品質工学のヘソを語る」

応用計測研究所株式会社
代表取締役 矢野 宏

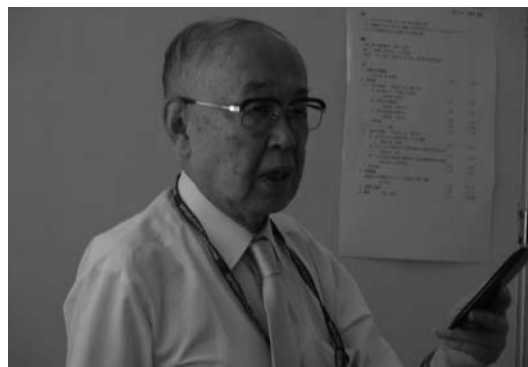
マツウラニュースには「日本のヘソ」という欄がある。福井の地理的なものと言ったと思うが、最近の松浦機械製作所の成果は、「品質工学の核心」に迫るものがある。2011年春には、2つの賞、財団法人精密測定技術振興財団品質工学発表賞の金賞と銀賞を研究発表会で受賞したことは、すでにマツウラニュースでも、また日刊工業新聞でも紹介されている。これ以上の誉れはない。しかし、かつて平成12年に「スピンドル（主軸）の機能性評価に関する研究」で銀賞、平成21年に「機械加工セルにおける制御ソフト評価の効率化」で富山経営者協会品質工学賞を受賞しており、合計4賞である。大手企業ならば、このように複数の受賞は数例ある。しかし、規模として大きくない企業で受賞するのは尋常ではない。何故このようなことが起きたのか。

筆者は、平成2年から、この企業に関わってきた。多くの大学関係者が高く評価しているのは、現松浦正則会長の人徳にあると見て、精密工学会の経営者懇談会で講演された時、幹事として対応したが見事なものであった。しかし、率直にいうと、技術的には不十分な会社と批判したところ、これを受けてくれたのは松浦勝俊社長であった。これから筆者との闘いが始まった。

平成12年にスピンドルの電力評価の成功で受賞したが、その後は順調な展開ではない。品質工学を適用するというのは、訳の分からないことを行なうものと思われたらしい。スピンドルの温度上昇を抑えるのに温度を測定せず回転時の電力を測るというのは、品質工学の真骨頂ではあっても、これまでの技術者には不思議なものとして映る。

本質に迫るためには、品質工学では測るなという品質の研究から始まり少しずつ実績を積上げてきた。筆者が問い詰めている席に、会長や社長が出席すれば担当者はたまったものではない。嫌でも緊張せざるを得ない。いずれの企業でも技術者は、それなりの技術レベルを持っている。それを有効に使う方法を知らないだけである。しかし、それを教えたからと言って、どうなるものではない。自ら気付いて仕事を進める以外にはないということが分かるには時間を要する。

筆者は、まず実験を始める前に「研究論文を書け」と言っている。そんなことが出来るのかと思うのが普通であろう。しかし、この会社の技術者は少しずつではあるがこの作業を始めた。当然実験の成功率も上がり、技術者自身も成長する。これがはっきりと見えてきた。去年から今年にかけ6つの大会発表があり、しかも全てが論文として書かれるようになって来ている。このことは、規模の大小に関わらず、期待する所以である。



▲矢野宏氏

シングルorダブル オールドファッション



社長 松浦 勝俊

9月まで続いた暑かった夏も終わり、10月に入ってから漸く秋らしく涼しくなりました。この号がお手元に届く頃は、秋真っ盛りだと思います。

忘れもしない3月11日の悲劇から半年以上が経過し、復興に向けての様々な取り組みや国としてなすべきことが徐々に具体的になってきています。道のりは簡単ではないですが、国民一人一人がサポートしながら一歩一歩進めていかなければならないと思います。

さて、その間にも政治の世界では国のリーダーも変わり、欧州では世紀の実験であった新通貨「ユーロ」を取り巻く環境も更に混迷の度合いを増してきました。アメリカでは、バブル経済後の日本が陥ったようなデフレ状態に入っており、日本で未曾有の大災害が発生したにも関わらず外国為替は、日本人の我々の理解ににくい円高水準が定着しています。

また、ここ数年世界を牽引してきた中国景気も流石に今後の調整期間が長引きそうで、その動向に世界中が注目しています。

この半年超で世界中で色々なことが起きていますが、それら情報の伝達速度はとても速く、どの経済ニュースも密接に我々の生活に影響を与えるものばかり。世界中のお客様と取り引きする関係から色々な国で仕事をする機会を多く頂き、割と世界を身近に感じたりもするのですが、それでも最近「本当に世界は小さくなったんだ」と痛感させられます。

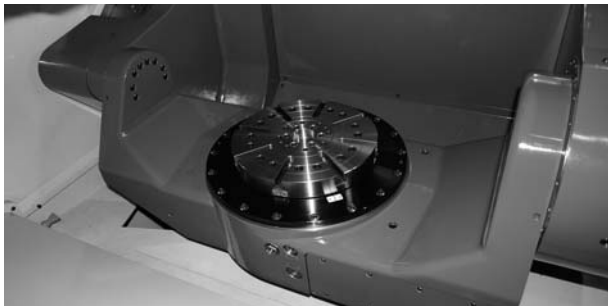
時差も国境もなく繋がってしまったグローバル経済。何処からでもアクセスできる情報化社会。あまりの変化の速度に戸惑う一方で、我が社の生業である工作機械製造の世界は、いい意味で職人的なオールドファッションな感性を持っているような気がします。工場で従業員が精魂込めて緻密に組み上げていく機械を眺めていると、気忙しい外界を離れた、少し落ち着いた気分にもなります。実際は、気忙しい時間を気にしながら迅速に機械を組み上げている従業員には、怒られるかもしれませんが…。

マツウラの商品は、変化の早い社会で戦うお客様の「道具」であり「相棒」（言い過ぎとは思いたくないですが）である筈ですから、ハイテクマシン然とした雰囲気は持っているでしょうけど、我が子のような血の通ったところがあって欲しいと思う部分もあります。何かオールドファッションは、流行らない感じでしょうか？

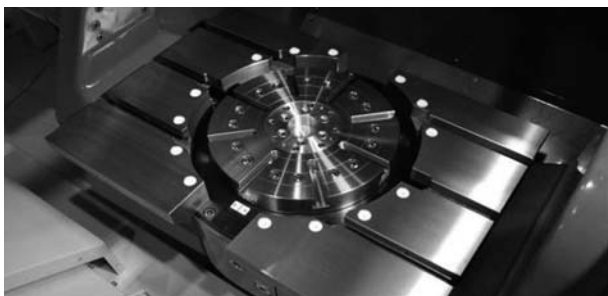
お知らせ

1 5軸制御立形マシニングセンタ「MX-520」の新オプション「フラットテーブル」について

平成 22 年 4 月に **MX-520** を発表し、国内外の多くのお客様に導入頂き、好評を頂いています。**MX-520** は 5 軸加工の導入機として、初めて 5 軸加工に取組まれるお客様も多く、様々なご要望がありました。その中で、インデックスの横にサブテーブルを置いて、3 軸加工機として使用したい、また 1 台で複数工程を行いたいのご要望があり、その対応としてインデックスの左右に固定テーブルを置いた「フラットテーブル」のオプションを設定しました。これにより、更に使い勝手が向上し、1 台で加工できる工程を考える上で様々な工夫が行なえます。詳細は営業本部、または各営業所にお問い合わせ下さい。



▲通常テーブル



▲フラットテーブル

2 マツウラホームページのリニューアル

マツウラホームページを10月にリニューアルいたしました。機械の最新情報を写真、また映像で確認できます。是非アクセス下さい。URL: <http://www.matsuura.co.jp/>



「風をつかまえた少年」

アフリカのマラウイ共和国マシタラ村に住む少年が14歳の時、手作りの風車で発電をした。少年の名前は「ウイリアム・カムクワンブ」。

マラウイ共和国とは、アフリカ中央部のタンザニア、モザンビーク、ザンビアに囲まれた国で、1964年にイギリスから独立、面積は11.8万平方キロ、人口は約1300万人、主要産業は農業で、世界貧困のひとつです。

マラウイ国は2000年ごろ干ばつで食糧危機になり、カムクワンブ君は食べていくため学費が払えず、中学校に行けなくなった。ある日、彼は自転車のライトと発電機(ダイナモ)に出会い、どうしてライトがつくのか興味を持った。そして、父親の友人の自転車を借りて、ラジオのACソケットにダイナモのリード線を繋ぎ音になることで電気の味を覚えた。そんな中、NPOが小学校に小さな図書館を作り、アメリカ政府から寄贈された本があること思い出し、その図書館に通い本を読んでいった。その時出会った本(英語)が『物理学入門』と『エネルギーの利用』であり、これを読むうちに、発電の仕組みが理解できるようになった。仕組みを理解すると、風車を使えば電気が作れることに気が付くのです。

電気のある生活が出来れば、お母さんの家事が楽になる、そのために自力で風車の建設を決意するのです。廃材置場に通い、様々な廃材を集め、大変な苦勞の末風車を完成させたのです。更には配線、変圧器、昇圧器、ブレーカーも作り電気のある生活が実現したのです。そして、このことが知られることで、彼は中学校に再び通えるようになりました。その後南アフリカの高校に進学。遂には2010年アメリカの名門ダートマス大学への進学を果たすのです。

この物語は『風をつかまえた少年』(文藝春秋)に書かれています。学校の図書館で出会った本がきっかけで人生が切り開けていく。学ぶということが人生を豊かにしてくれることを彼の体験は語っています。また自然エネルギーの利用は、そもそも人々を貧困から救い出してくれるのです。このことも彼は身をもって示してくれました。

本号の書き終わり

* 日本工作機械工業会から平成 23 年 9 月度の受注状況が発表されました。9 月度の工作機械受注額は 1,105 億円となり、前月比 11.7%増と 3 ヶ月ぶりの増加となりました。本年の累計受注額は 9,971 億円となり、受注総額の見通し「1 兆 3 千億円前後」には、10 月以降毎月 1 千億円ペースで到達することになります。内需は 355 億円で前月比 5.5%減と 2 ヶ月ぶりに減少となりました。円高や震災により国内ユーザの収益改善の遅れで、設備投

資予算の執行が先延ばし傾向にあり、内需は一進一退の状況です。外需は 750 億円で前月比 22.3%増と 3 ヶ月ぶりに増加しました。地域別で見ると、アジアは中国の「金融引締め」の影響もあり、346 億円で前年同月比 4.3%減と 2 ヶ月連続の減少ですが、受注額は依然高水準です。欧州は、138 億円で前年同月比 47.0%増と 21 ヶ月連続増加ですが、金融不安の懸念があり注視すべき市場です。

* TMT マシナリー社様の取材では、5 軸 複 合 マ シ ニ ン グ セ ン タ「**CUBLEX-63**」よりも、会社設立

の経緯が中心となりました。グローバル市場で戦うには業界再編成が必要とマスコミなどではよく主張されていますが、金融機関の合併は行なわれませんが、製造業で不可能と思っていました。しかし、事業部単位での合併による新会社という同社の設立には、様々な産業での可能性があると実感しました。驚異的な円高で競争力が低下している日本企業にとって、生き残るための新たなモデルとなるのではないかと期待が膨らんだ取材でした。

管理本部ゼネラルマネージャー 上村 誠